

人文学部プロジェクト活動

人文学部は、以下のプロジェクトに戦略的経費（研究プロジェクト助成）を配分しています（右は代表者名）。

刊行物助成

英語と英米文学	上田 由紀子
独仏文学	Michel de Boissieu
山口地域社会研究	速水 聖子
山口大学哲学研究会	村上 龍

『英語と英米文学』

『英語と英米文学』は、山口大学人文学部・教育学部・経済学部・国際総合科学部・教育支援センターに所属する教員グループが、年1回刊行している学術研究誌である。メンバーは現在13名で、このうち人文学部教員は欧米言語文学コース所属の6名（太田聡、上田由紀子、藤原慶樹、池園宏、外山健二、カテリーナ・オリハ）である。掲載内容は各メンバーの日頃の研究成果を反映した論文等で、その領域は英語学・英米文学・英語教育・英語圏文化など多岐にわたっている。1965年に創刊された本誌は半世紀以上に及ぶ歴史があり、今年度で第59号の刊行を迎えた。そして、今号は「太田聡教授退職記念号」となった。最新号の掲載内容は以下の通りである。

1. アメリカ合衆国の州名のアクセント型に関する一考察
(太田 聡：人文学部)
2. The Role of Specificity in the Acquisition of English Articles and its Pedagogical Implications for Japanese EFL learners
(Toshiaki TAKAHASHI：教育学部)

3. On *Why*-in-situ in Japanese: Presuppositional Properties of *Why*-Question

(Mai KUBOTA：教育学部)

なお、人文学部から配分された戦略的経費（研究プロジェクト助成）は、今年度の刊行・発送に要する費用の一部として有効に活用されている。また、本誌の電子版は山口大学学術機関リポジトリYUNOCAにより学内外に広く公表されている。これらの支援を受け、『英語と英米文学』は今後も継続的に各研究者の活動成果の公表に寄与していく予定である。

(上田 由紀子)

『独仏文学』第46号

山口大学独仏文学研究会が刊行している『独仏文学』は、ドイツ語文化圏およびフランス語文化圏の文学や言語学をはじめ、文化、歴史、社会、美術など幅広い分野の研究論文を掲載する学術雑誌である。当雑誌では、投稿論文の質を確保するため、2018年の総会の決定に基づき査読制度が導入されている。今年度、編集委員会は、学外の研究者3名に審査を依頼した。第46号に掲載されるのは次の3本である。

1. Michel de Boissieu : *Die Beunruhigung* (1982)
et Erscheinen Pflicht (1984) : *malaise en RDA*
2. 武本雅嗣 : *La t elicit e des verbes "courir" et "marcher"*
3. 下寄正利 : *Der Ursprung vom Stammaslaut w
der westgermanischen Verba pura*
(Michel de Boissieu)

「山口地域社会研究」プロジェクト報告

「山口地域社会研究」プロジェクトは山口地域社会学会の研究活動を中心としており、現在に至るまで、例年2回の研究例会の開催、ならびに年1回の学会誌『やまぐち地域社会研究』の発行を継続して行っている。研究例会は、会員によるそれぞれの研究発表を毎回2~3本ずつ報告する形で行われ、活発な意見交換がなされている。人文学部の現教員は横田尚俊・速水聖子（現代社会学）、高橋征仁・桑畑洋一郎（社会心理学）、谷部真吾・小林宏至・山口睦（民俗学・文化人類学）の計7名で、社会学コースの教員全員が学会員である。さらに、経済学部や教育・学生支援機構、時間学研究所所属の教員会員のほか、大学院人文科学研究科（修士課程）と大学院東アジア研究科（博士課程）の学生会員もおり、例会は教員のみならず大学院生の研究成果発表として大きな役割を担っている。

2024年は、7月と11月の2回にわたって人文学部小講義室にて例会を行った。

第55回研究例会は8/3（土）に開催され、「コロナ禍を契機とした地方移住の質的変容について―山口県央地域の動向を中心に―」山本悟（山口大学大学院経済学研究科）、「ポストフェミニズム文脈からみた日本と中国のSNSフェミニズム議題の位置づけに関する試論」屈融（山口大学大学院東アジア研究科）、「真正な日本としての山口」桑畑洋一郎（山口大学）の3本の報告がなされた。

続いて第56回研究例会は11/30（土）に開催され、「復讐者から愛国者へ：「紅衣悪霊」をめぐるポリテクス―中国山東省済南市のお化け屋敷「港詭1997」を事例に―」于嘯（山口大学大学院東アジア研究科）、「『子縁』のコミュニティについての試論」速水聖子（山口大学）の2本の報告がなされた。

いずれの例会においてもフロアからの発言をふまえ、質疑応答が活発に行われ、参加者にとって有意義な研究会となったことが期待される。今年度の研究例会の成果を踏まえて、年度末に学術雑誌『やまぐち地域社会研究』（第22号）を刊行する予定であり、現在、編集作業を準備しているところである。第22号は横田尚俊先生退職記念号となることも付記しておきたい。
(速水 聖子)

『山口大学哲学研究』

『山口大学哲学研究』は、山口大学哲学研究会が毎年刊行する会誌である。山口大学哲学研究会は、山口大学に所属する哲学・思想系の教員を中心とする組織で、会誌の刊行のほか、合評会、研究発表会などの活動を行っている。現在、正会員（学内の常勤職員である会員）は12名で、そのうち人文学部の教員は、ジュマリ・アラム、伊藤裕水、柏木寧子、栗原剛、藤川哲、村上龍、横田蔵人、脇條靖弘の8名である。

他部局の正会員は、田中智輝（教育学部）、山本勝也（経済学部）、小川仁志（国際総合科学部）、小山虎（時間学研究所）の4名である。また、名誉会員（過去に山口大学に所属したことのある学外の会員）は22名で、そのうち人文学部の元教員は、上野修、遠藤徹、加藤和哉、木村武史、周藤多紀、武宮諦、田中均、外山（松本）紀久子、林文孝、古荘真敬、頼住（佐藤）光子の11名である。2024年度は、村上龍（人文学部）と横田蔵人（人文学部）が運営委員を担当した。

本年度も例年通り会誌『山口大学哲学研究』の刊行を続けた。2024年3月（昨年度）刊行の第31巻は、年度をまたいだ2024年4月、会員諸氏・諸機関宛てに送付した。掲載論文等は、「『葉隠』における忠誠の倫理：諫言の理想に即して」（栗原剛）、「鄒平伏生墓について」（伊藤裕水）、「『今昔物語集』天竺部における釈迦仏の因果」（柏木寧子）、「バルクソンの「持続」における「不連続性」の契機：バシュラールによる批判を逆説的な導きとして」（村上龍）、〈研究ノート〉「香月泰男『海拉爾通信』索引」（藤川哲）の五本である。刊行に際し、人文学部より支給された「刊行物助成経費」を、印刷・製本費用の一部に充てさせていただいた。また、第32巻は2025年3月刊行の見込みであり、頼住（佐藤）光子、栗原剛、ジュマリ・アラム、藤川哲、柏木寧子の各氏による研究論文等の掲載が予定されている。

（村上 龍）